

土木史研究の変遷に対する一考察～土木史の通史的体系化に向けて～

東北学院大学 学生会員 鈴木 雄大
東北学院大学 正会員 石川 雅美

1.はじめに

時代の流れの中で土木事業に求められる役割は変化・多様化している。その動きに対応するためには、過去の事業を知ると同時に、地域・自然など土木事業と深く関わる要素がどのように扱われていたか、相互関係はどうだったかを正に評価し、理解する必要がある。正しく理解するためには、時代・地域に縛られず全地域・全時代にわたり、複数分野（構造物種別、学問分野、地域など）との相互関係を重視し通史的に歴史を見なければならない。しかし、現在の土木史研究において相互関係を重視し体系化されたものは極めて少ない。そこで本論は、土木史研究の変遷について考察し、土木史の通史的体系化の現状について明らかにするものである。

2.土木通史の定義

一般的に「通史」とは、「歴史記述の一方法。一時代・一地域に限らず全時代・全地域にわたって時代の流れを追って書かれた歴史」のことである。これを、土木史に適用し、土木通史を次のように定義する。

2つ以上の時代または、2つ以上の地域を対象として歴史記述をしている（定義1）。時代の流れを大局的に捉え歴史記述をしている（定義2）。構造物（種別）・学問分野・地域において、対象となるそれらの完成（形成）によって他分野、後世に及ぼした影響についての記述している（定義3-1）。技術者間の相互関係において、技術伝承または薫陶の有無についての記述している（定義3-2）。

以上のいずれかを満たす土木史記述を土木通史とする。また、通史と対照的な記述である「テーマ史」を次のように定義する。時代区分に限らず、分野（構造物種別、学問分野、地域など）を細分化し記述された土木史記述（テーマ史の定義）。

3.「土木史文献目録」の作成およびデータ抽出

土木史文献の発行状況および記述法の内訳から、土木史研究の変遷について考察を行うため、土木学会論文集・土木学会誌を主な対象とし文献の収集をした。これらの文献を2節の定義を用いて整理・分類、内容を精査し、各種データの抽出を行った。

4.土木史研究史の変遷と考察

3章において作成した、目録から判断し、土木史研究史における時代区分を次のように定義する。

- (1) 黎明期（1918年－1936年）
- (2) 冬の時代（1937年－1950年代）
- (3) 成熟期（1960年代－1970年代）
- (4) 最盛期（1980年代－1990年代）
- (5) 停滞期（2000年代－現在）

この時代区分および目録をもとに作成した図-1・図-2を参考に、土木史研究の変遷について考察する。

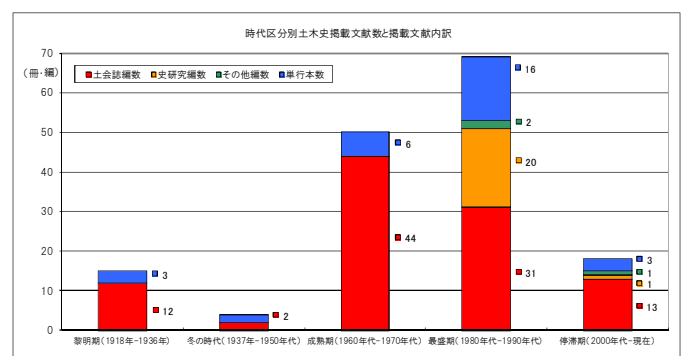


図-1 時代区分別土木史掲載文献

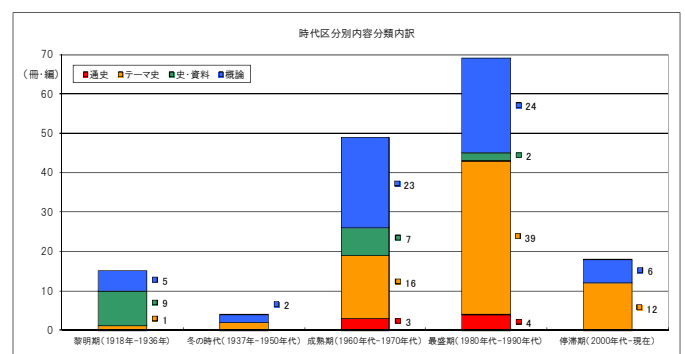


図-2 時代区分別内容分類内訳

キーワード 土木史研究史 土木史

連絡先 〒985-8537 宮城県多賀城市中央1-13-1 TEL:022-368-1189 FAX:022-368-7070

(1)黎明期(1918年－1936年)

この期間、土木学会誌連載の渡邊俊一『彙報 日本土木史料』(1930－1931年)などにより土木史料の収集が始められた。また、名著、土木学会『明治以前日本土木史』(1936年)が編纂されており、史・資料の集積的性格が強いが、**土木史編纂の動きが勃興したのがこの時期である。**

(2)冬の時代(1937年－1950年代)

戦間期と重なるこの期間は、土木史文献掲載の中心であった土木学会誌が1944年5月以降休刊したこともあり、土木史文献の発行数は計2冊・編と落ち込む。当時の世相を鑑みると**土木史を軽視する風潮**が有ったことは想像に難くない。

(3)成熟期(1960年代－1970年代)

この期間、土木史文献の冊・編数は安定しほぼ毎年発行されるようになる。さらに、1973年、土木学会において常設の日本土木史研究委員会が設置され**土木史研究の活動拠点が確立**され、研究の質・量ともに充実するに至った。

(4)最盛期(1980年代－1990年代)

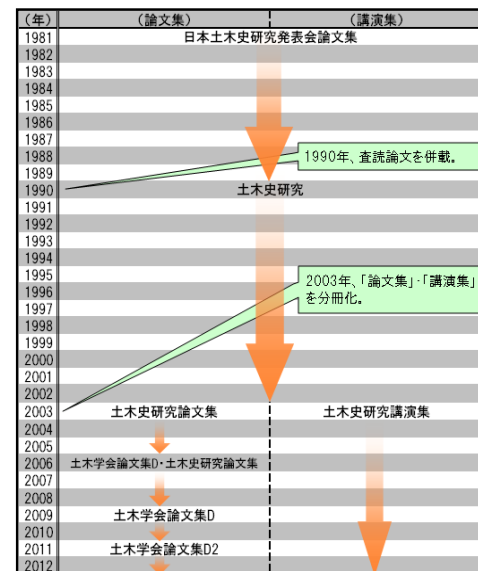
1990年、日本土木史研究委員会が名称変更、「土木史研究委員会」となるとともに**審査付き論文集『土木史研究』が新設**され、活発な研究がおこなわれるようになった。一方で、土木史文献掲載誌内訳に注目すると土木学会誌が約50%を占めており、学問として重要視されていたとはいえない。

(5)停滞期(2000年代－現在)

内容分類において、**テーマ史の割合が最も高い**のがこの期間である。テーマ史研究が盛んに行われる一方で通史記述が減少傾向にあり、土木史の通史的体系化の動きは鈍くなっている。

5.土木学会による土木史研究の変遷

現在、土木史研究は土木学会土木史研究委員会を中心に行われている。その活動の柱となっているのは、土木史研究発表会の開催と土木史論文集の審査・編集である。**図－3**は土木史研究論文集の変遷を示したものである。1981年、審査無しの「日本土木史研究発表会講演論文集」として創刊、途中数回の改編を経て、2011年、土木学会論文集D2分冊として土木学会論文集へ統合され、土木史の学問的地位は他分野と同等のものとなった。



図－3 土木史論文集の変遷

6.土木史研究における高橋裕の功績

高橋裕(1927－、以後、高橋)は河川工学を専門とする土木工学者であるが成熟期において土木学会日本土木史研究委員会の設置に尽力するなど、土木史研究においても大きな業績を残している。

特に、土木史の通史的体系化という観点においては、①通史記述主体の『現代日本土木史』(1991年)を著し、②『日本土木史昭和41年～平成2年』(1995年)の編纂において、テーマ史的記述の問題点を明らかにし通史的記述の導入を試みたことが最大の業績である。黎明期から数えて77年目のことである。

7.おわりに

土木史研究は以上の変遷をたどり現在に至っている。土木学会により研究の拠点が確立され、土木史研究は活発に行われるようになった。しかし、現在の土木史の主体はテーマ史であり、最盛期における高橋らの活動以降、通史的体系化の動きは見られない。今後、土木通史をいかに充実させていくかが土木史研究の課題といえよう。本論がそのきっかけ、土木史の通史的体系化に向けた議論の叩き台となれば幸いである。

参考文献

- 1) 高橋裕:現代日本土木史, 彰国社, pp1-192, 1991.5
- 2) 土木学会:日本土木史昭和41年～平成2年, 土木学会, 1-12, 1995.7
- 3) 土木学会:土木学会略史 1994－2004, 土木学会, pp93-95, 2005.8